

収集：日常の風景

濾過：現象の抽出、言語化



「光と現象の辞書」
'Dictionary of Light and Phenomena'



日常生活には、注意深くしないと見過ごしてしまうような興味深い光景や現象がたくさん潜んでいる。

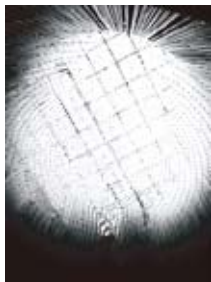
それらは、写真を撮る時間や構図を変えてしまえば、消えてしまうようなはかない現象ばかりであるが、そのはかなさの中にも人を引き付ける可能性をはらんでいるように思う。

そのようなささやかなモノによって、自然と人が導かれていくような空間が成り立っていくことはできないだろうか。

ささやかな日常生活の風景の中から、そこで起こっている現象をより深く理解するために、写真を加工していくことで現象を抽出し、言語化していく。

結果として生まれた「光と現象の辞書」を使うことによって、光の効果によって掘り所が生まれる、いうなれば「現象によって空間自体が変容し、人が導かれていくような空間」を作ることができるのではないだろうか。空間が現象をおこし、現象が行為を誘発していく、そういう空間を目指していきたい。

A part of contents of dictionary



シャワー shower

細分化することによって視線や光の通る部分、通らない部分が発生する。

関連： ルーバー
出現・消滅



カット cutting

影が空間を切断する。強力な光によって実現され明暗の強いコントラストが、そこに物理的には存在しない境界線が発生させる。

対： うねり
かすみ
しんしよく
関連： ビーム



ビーム beam

暗闇に覆われた中に切り裂かれた隙間によって光線が落とされる。それによって空間は切り裂かれ、空間は2つに分断される。光は物理的に存在しない境界線となる。

関連： カット



ネガポジ negative/pogitive

屋根の形が地面に苔のない部分の形そのままに投影され、時間経過の痕跡として地面に記録される。そこには空間の反転が起きている。



ぼかし shading

反射面に曇りがかけられていることで、反射した像がはっきりとした姿を見せなくて反転される。ここでは「リフレクト」のように倍の空間は出現しないが、像の雰囲気だけは倍加されているのかもしれない。

対： リフレクト

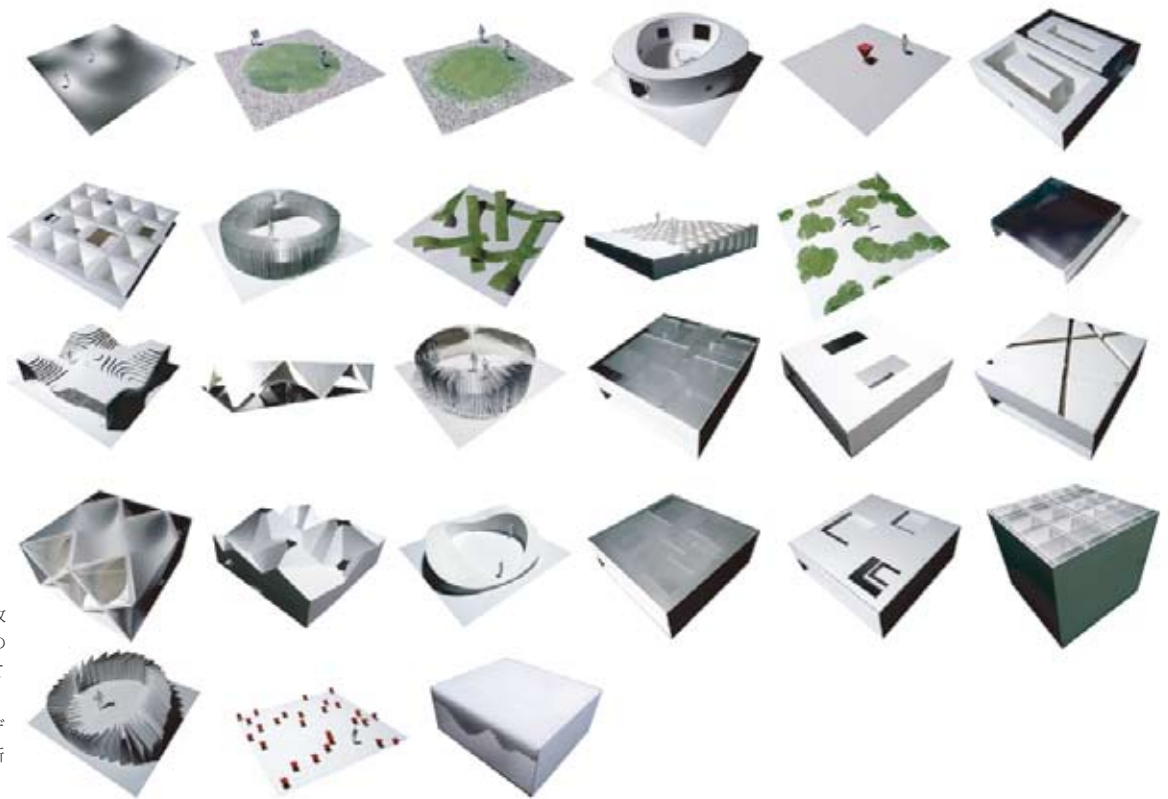


スクリーン screen

スクリーンに投影された影は、その奥にある物体の存在を喚起させる。また、スクリーンの素材や枚数を変えることで投影する光と影の濃度をコントロールできるだろう。

展開：現象のモデル化

検証：現象の生成



辞書を引用することで、20ほどのモデルが出来上がった。ここで作られた空間装置は、写真1枚に1つあるわけではなく、言葉からのイメージの読み換えや、複数の言葉の組み合わせで作られていく。
そして、そこから発展していったいくつかのモデルは、辞書からは見出すことができなかった新たな現象や空間構成を持ち始めることになる。

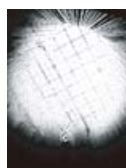


水面にきらめく光のような

複雑な光が大げさな装置によって生み出される。光は概して空間に明暗のヒエラルキーを生み出すが、ここではそういうものを超越し、直射光と反射光が予期せぬ光を作り出す。



おおう



シャワー



ルーバー

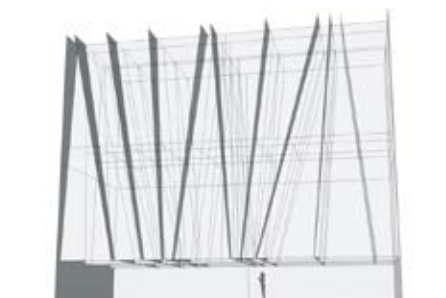


うがつ

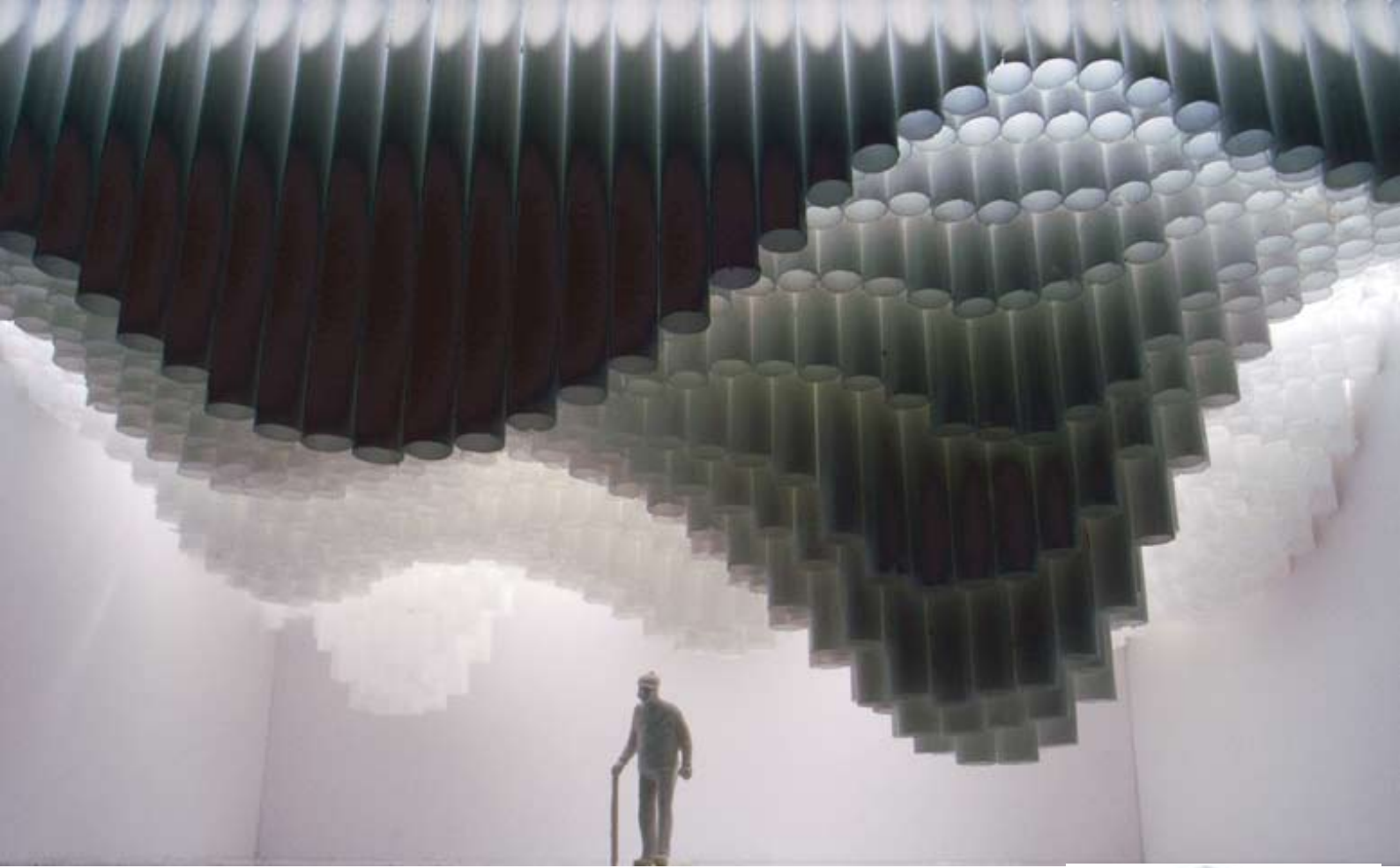
辞書から引用された言語



イメージの読み換えによるモデル



断面バー

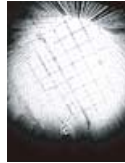


ゆらめく雲のような

光源の位置によって、室内に落ちてくる光は流動的に変化する。
 真上から落ちる時は室は前面が明るくなり、斜めに入ってくる時はその角度に応じ、室は部分的に明るくなる。
 光を作り出す空間装置としての屋根は、実態空間としての性格も持ち合わせており、光の変化する空間性と実体の空間性がギャップを作り出し、空間は変容していく。



おおう



シャワー



光のトリミング

トリミングされた光はどんどん小さくなり、弱まっていく。
 トリミングされればされるほど光の弱まるが、弱められる割合がまばらであること
 でさまざまな強度の光が落ち、さまざまに明暗を作っていく。



うがつ



おおう



ネガポジ



集積：加筆される辞書

モデルから生み出された現象は、太陽が動くのに従って、人間が動くのに従って、時の流れに従って変容していく。その現象を作り出すための装置であったはずのモデル（空間）は、その現象と出会った瞬間、単なる装置ではなく、現象の変容に伴いその抛り所の形態や位置を刻々とつり変えていく。現象の移り変わりによって人間の体験は、空間のもつ抛り所とともに変容していくのではないだろうか。

モデルから引き起こされた現象は、「新たに光と現象の辞書」に書き加えられ、辞書は厚みを増し続けていく。そしてこの辞書は今後の設計活動をしていく上でのツールになり、ここで提示した方法や模型は、人を限定的ではなく、自発的に場を見出させていくことが可能となるのではないか、という期待を持つ。

ここに展示された20の模型は、現象の博物館であると同時に、「光の作る領域」、「柱の疎密」によって人の動きや行為を促していく「変容する体験」を体現した空間なのだ。



柱の疎密と光によって作られた「変容する体験」の場